

大阪・関西万博の理念構築に向けての提言 ～ 日本ならではの世界観を～

EXPO 2025の具体案をBIE(博覧会国際事務局)に示す期限が迫っている。「いのち輝く未来社会のデザイン」のテーマの下にどのような理念や世界観を構築し、何をレガシーとして残すのか。千里文化財団と関西・大阪21世紀協会が協力し、EXPO 2025の理念構築に向けて有志の識者による検討会を設置。座長の中牧弘允氏が提言をまとめた。

大阪・関西万博を考える会

呼びかけ人
中牧弘允(一般財団法人千里文化財団 理事長)
堀井良殷(公益財団法人関西・大阪21世紀協会 理事長)
事務局
久保正敏(一般財団法人千里文化財団 専務理事)
大石なつ美(一般財団法人千里文化財団 理事兼事務局長)
佐々木洋三(公益財団法人関西・大阪21世紀協会 専務理事)

「いのち」を考える万博

～制度から運動へ、「パビリオン」から「アリーナ」へ～

一般財団法人千里文化財団 理事長 中牧弘允

はじめに

2025年大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに大阪市の人工島・夢洲で2025年5月3日から11月3日まで開催される。サブテーマは①「多様で心身ともに健康な生き方」②「持続可能な社会・経済システム」であり、コンセプトは「未来社会の実験場」となっている。

それに向けて一般財団法人千里文化財団は公益財団法人関西・大阪21世紀協会の協力を得て7名の有識者(P8)に検討会への参画を呼びかけた。そこで自由に提案し討議してもらった結果、「熟議マンダラ」(図1)と「熟議スパイラル」(図2)という二つのモデルが抽出された。

「熟議」がキーワードとなっているのは、日本だけでなく世界中のすべての人びとと共に「いのち」を取り巻く課題について理解を深め、その解決に向けた議論を重ねたい、という狙いにもとづいている。万博という世界最大級のイベントが6カ月にわたって開催されることは政治、経済、文化等にはかりしれない影響力をもつ。しかも、その影響は将来においても長期にわたって持続する。したがって、基本理念をはじめ、会場デザインやパビリオン展示についてもさまざまな観点から、慎重かつ大胆に、熟議を重ねる必要がある。

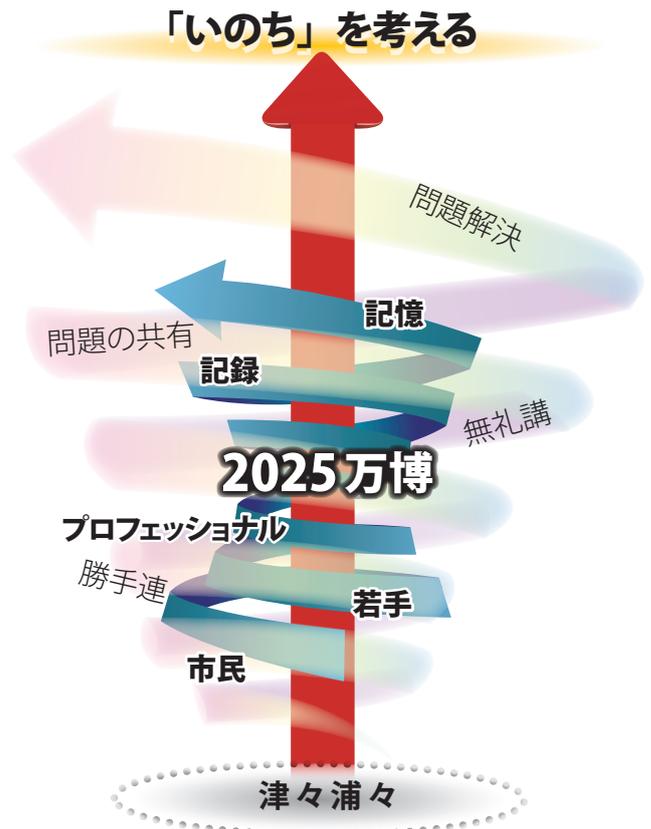
今回、各有識者から提示された案をいわゆるKJ法(注1)をもちいて全員で分類してみたところ、一種のマンダラができあがった。それを「熟議マンダラ」とよびたい。なぜなら「熟議」の周囲に8つのトピックがあつまり、マンダラで言えば、中央の大日如来の周囲に諸仏が配置されたような格好となったからである。いわば八葉蓮華の風情である。

他方、「熟議」を成長・発展するスパイラルにみたてるモデルもできあがった。多くの人を巻き込み、議論を積み重ねるなかで、だんだん高次元の認識に引き上げられていくという構図である。その収斂する先は本番の万博であるが、万博以後も拡散することが想定されている。これは「熟議スパイラル」と称することができる。

(図1) 熟議マンダラ



(図2) 熟議スパイラル



1 熟議マンダラ

1.1.「いのち」

1.1.1.いのち輝く未来社会のデザイン

「いのち輝く未来社会のデザイン」(Designing Future Society for Our Lives)が熟議の焦点である。ただし、日本語の「輝く」は英語に直接的には表現されていない。肝心なのは「いのち」である。25年万博は「いのち」について熟議する万博でありたい。その観点から、<「いのち」について考える大運動>が提唱された。全国津々浦々、家庭、学校、会社、町内会、各種サークル等、さまざまな単位で、「いのち」について熟議した経験と記憶、さらには記録を運動として未来社会へと引き継げば、それがレガシーとなる。

運動とは流動的でダイナミックな過程をさし、固定的な制度に対峙する概念である。制度とは規範にもとづく秩序構造であり、万博も国際博覧会条約に依拠するイベントである。そこにあって運動の概念を持ち込むのは、確固たる制度として存在する万博に対して、新しい息吹を吹き込むのは運動としての形態がふさわしいからである。

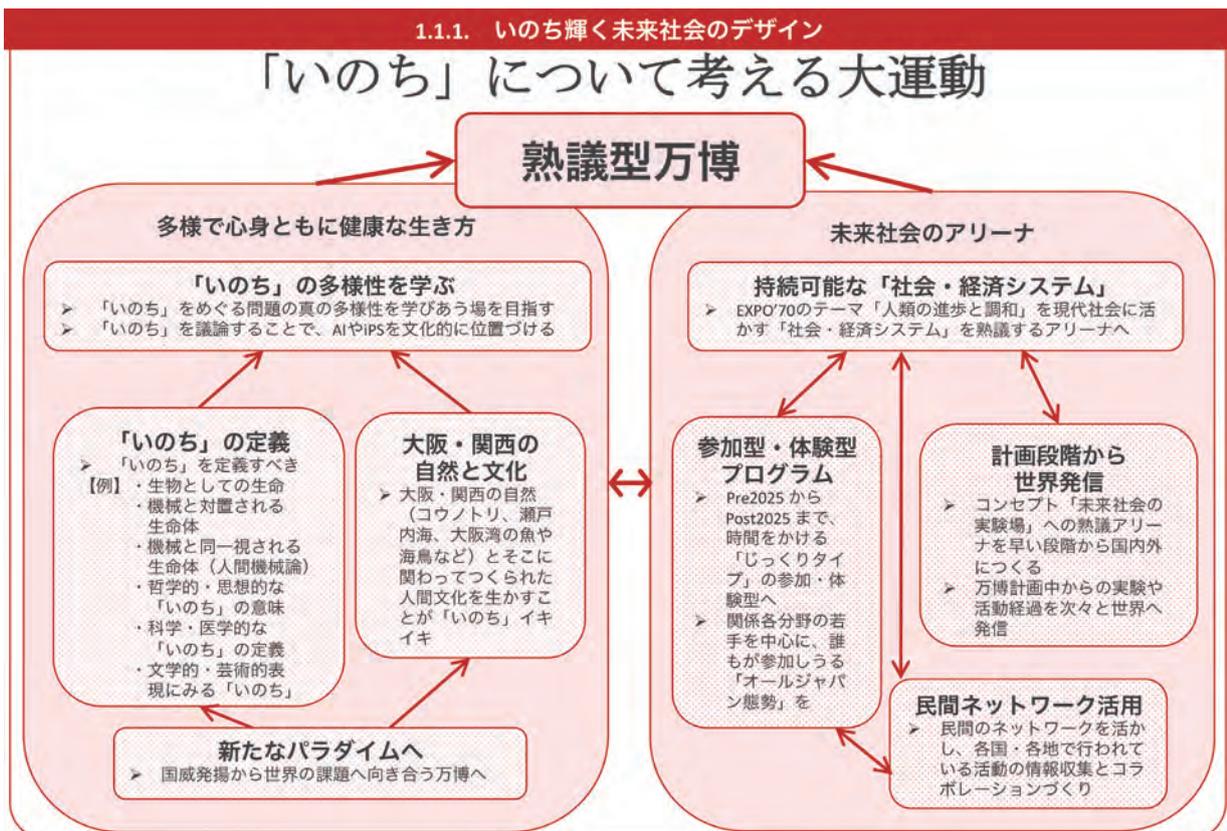
われわれが理想とする運動とは、小さくてもできるだけ多くの企画を打ち出し、国内外のゲストを全国津々浦々に送り込んだり、われわれ自身が学校を訪ねたりして、「いのち」に関する草の根の議論を巻き起こすことである。草の根からはじまり、それがスパイラルとなって25年万博を迎えられれば言うことなしである。モデルを求めるとすれば、第二次大戦後の荒廃のなかにあった日本で、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章の精神に呼応し、全国に広がった草の根の「ユネスコ運動」

が想起される。

もちろん「いのち」についてはさまざまな議論がありうる。自然界に生きる生物としての生命もあれば、機械と対置される生命体という見方もある。哲学的・思想的に「いのち」を考察することもできるし、科学的・医学的に「いのち」を定義することも可能であろう。文学的・芸術的表現にみる「いのち」も多種多様である。しかし、結論を急ぐ必要はない。熟成を待つという選択肢もあるはずだ。その上で「いのち」が輝くとはどういう状態をさすのか、議論百出を歓迎したい。

ふりかえると、こんにちの万博は「課題解決型」に舵を切った。科学技術の進歩を競い、国威発揚を優先する19世紀型万博から、20世紀末、世界の抱える問題に向き合う万博へと転換した。世界の課題に関する議論はおおいに奨励されるはずだ。なぜなら、万博は世界の人びとが自由に考え行動するアリーナ(場、舞台)を提供するようになったからである。アリーナは25年万博のコンセプト「未来社会の実験場」とも合致する。

<「いのち」について考える大運動>の出発点は「いのち」の多様性に関する認識であり、その目標(到達点)は未来社会へ引き継ぐレガシーである。この間、万博本番に向けての展開には二つの過程がある。一つは「課題の展開」であり、もう一つは「熟議の展開」である。「課題の展開」とは現代社会が抱える問題群への課題解決型のアプローチである。他方、「熟議の展開」とは熟議型万博にインセンティブをあたえ、アリーナを提供し、万博会場でも実践するところの運動過程である。これら二つの過程は相まって万博のレガシーに合流・貢献することになる。



1.1.2.「いのち」の多様性

25年万博では「いのち」の多様性を学び合うアリーナを提供したい。それは国際博覧会条約に謳われる「公衆の教育」という主旨にかなうものである。万博が制度的には啓発の場であり、学びの場であることを忘れてはならない。くわえて、もう一つ忘れがちなことは万博が「万国」を相手にしているという点である。Universal Expositionと言い、World's Fairと称し、全世界を視野に収めていることがポイントである。もちろん個別の万博は開催地が中心となってその時々の世界を表現・演出してきた。科学技術の進歩や国威発揚から問題解決型へとパラダイム・シフトをとげた万博は、グローバルな課題に向き合わなければならない。

今日、「いのち」をめぐるグローバルな課題と言えば、国連がかかげるSDGsが代表的なものである。しかし、それにとどまることなく、現代社会の直面するさまざまな問題に目を向ける必要がある。とりわけ生物多様性や文化多様性の認識が肝要である。なぜなら、「いのち」は科学や医学の立場からは画一的で普遍的であるが、生物学的・文化的にはきわめて多様性に富むものだからである。「いのち」にかかわる文化的な問題の最たるものは道德であり、倫理である。生命倫理にかかわる問題群も文化的に多様であり、熟議が不可欠である。

1.1.3. 未来社会へ引き継ぐレガシー

レガシーという言葉はふつう未来へ引き継ぐ遺産という意味でつかわれる。他方、ヘリテージという場合は、過去から引き継がれた遺産という意味合いが強い。語源的には、ヘリテージはたんに引き継がれていくものであるのに対し、

レガシーは遺志をもって引き継ぐべきものと定義される。

25年万博のレガシーと言う場合、それは遺志ならぬ意志をもって未来社会に引き継いでゆくものである。万博のレガシーは有形無形の人類の遺産となるものだからである。しかし同時に、仕掛けの段階から後始末にいたるまで、残すべきものを想定しておく必要がある。とくに有形遺産の場合は「始末に負えない」ものをつくらないことが賢明な選択である。

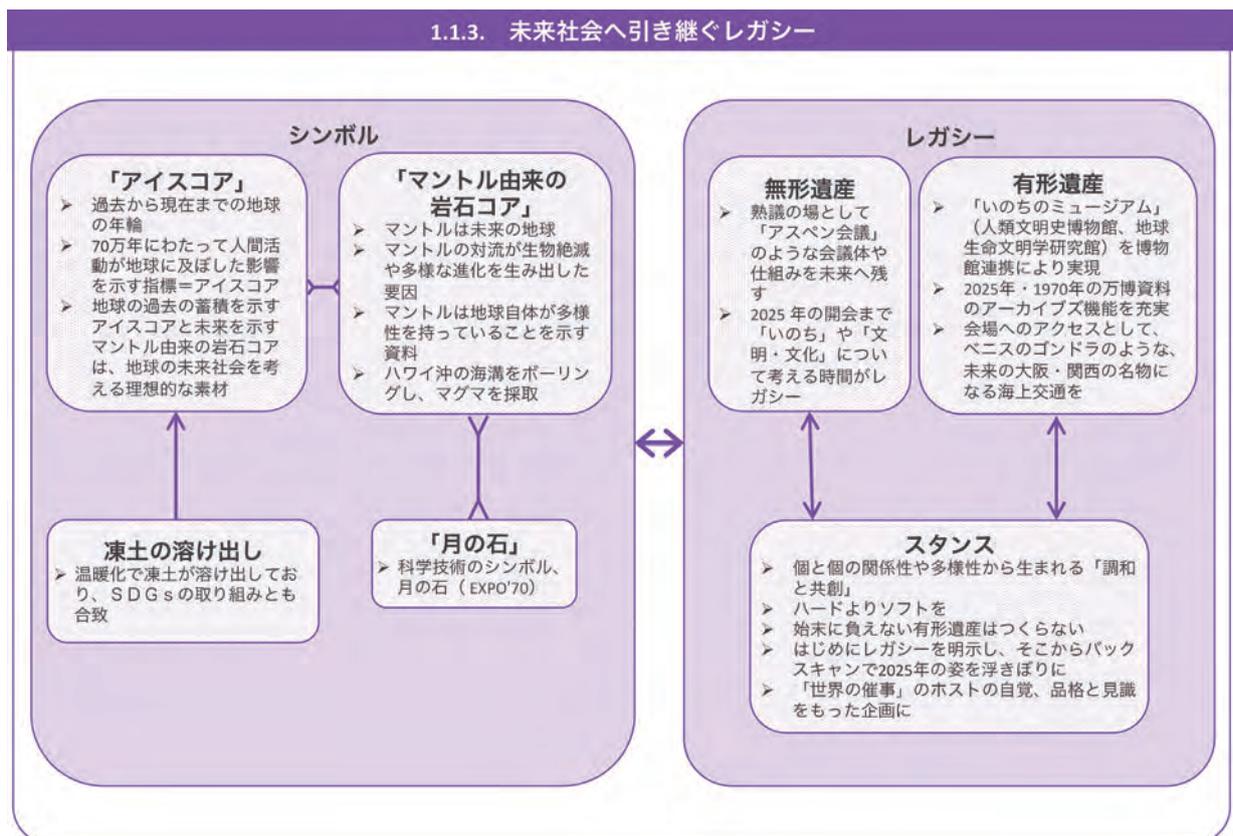
25年万博では、あえて中心をつくらない離散型の会場デザインが構想されている。未来社会のデザインは個と個の関係や多様性のなかから生まれる「調和と共創」としてイメージされている。また、「空」(くう)と呼ばれる大広場を設置することなど、いかにも日本的ではある。

とはいえ、70年万博の「月の石」のような目玉の展示資料があってもよい。その候補として「アイスコア」と「マントル由来の岩石コア」を提案したい。アイスコアは、氷床などで各国が採取している現在までの地球の年輪である。南極のドームふじ基地(国立極地研究所)で採取されているアイスコアは、70年以上の地球の環境変動と同時に人間活動の影響

を示す指標として、極めて重要な研究試料となっている。他方、マントルはその対流が地球環境変動や生物の絶滅



アイスコアの掘削作業 (提供: 国立極地研究所)



と多様な進化を生み出した要因であり、その一部は地球上にあらわれ岩石となることから未来の地球を示す指標でもある。マントルの上部を取り出す試みが日本を含む国際共同研究で進行しており、マントル由来の岩石採取と分析が進んでいることも指摘しておきたい。



日高山脈アポイ岳に産するマントルから上昇したとされる岩石
(提供：神戸大学海洋底探査センター教授 / センター長 / 巽好幸氏)



オマーン王国で2017年12月に実施された陸上マントル掘削の様子。掘削によって得られた岩石コアは2018年7月に清水港に停泊していた超深部探査船ちきゅうの船上ラボで解析された。(撮影：道林克禎氏)

地球の過去の蓄積を示す凍った「ア

イスコア」と、地球の過去と未来の一端を示すマントル由来の火山岩から採取された「マントル由来の岩石コア」は「未来社会のデザイン」を考える理想的な素材となりうる。

目玉のもう一つの候補は、日本列島を舞台に人類がいかに自然に順応してきたかを示すジオラマである。日本列島の地質学的・気候学的特異性にもとづく人類の暮らし(住居、土木、治水、農林水産業、冶金、窯業など)を展示することが未来社会をデザインする際の一つのヒントとなるであろう。

さらに夢を語れば、環境に順応してきた人類の文明史を壮大に演出する展示空間をつくり、来館者に感動と感銘

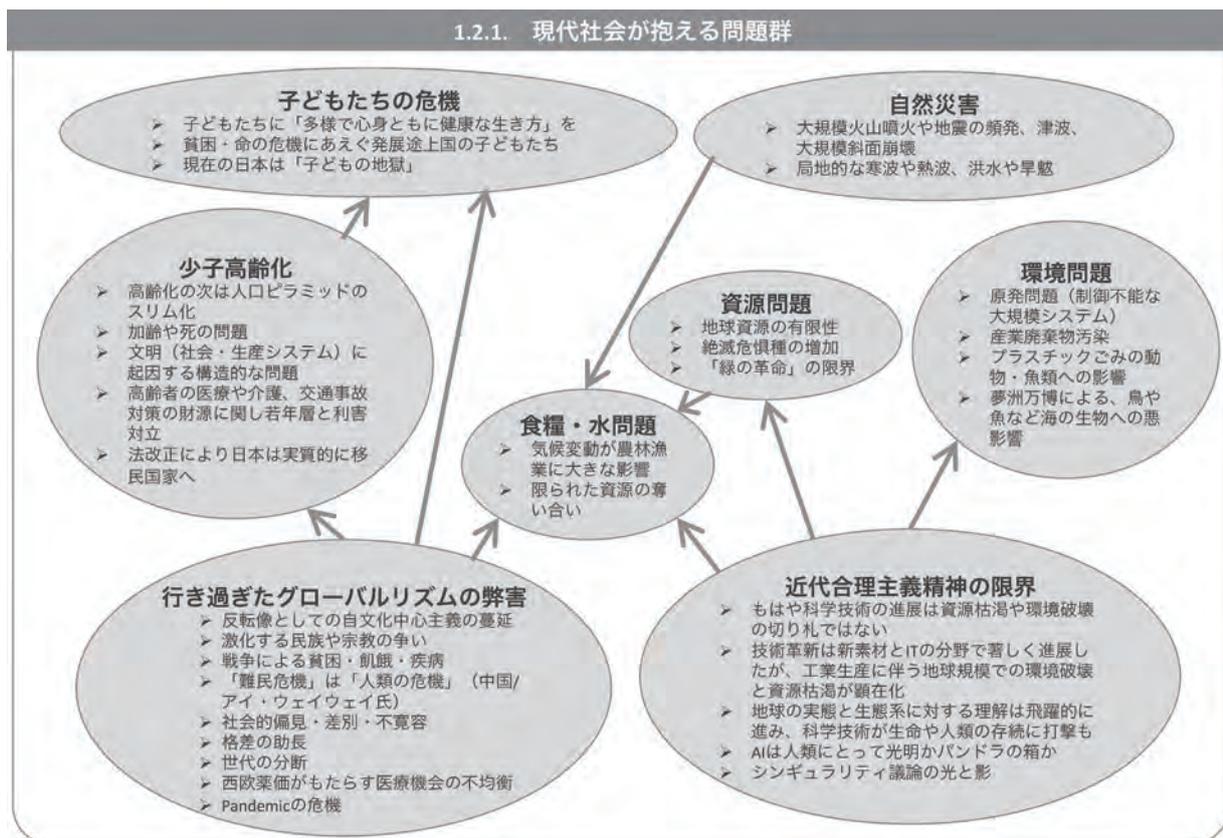
をあたえることが可能である。また、夢のまた夢としては、「いのちのミュージアム」(人類文明史博物館、地球生命文明学研究館)のような施設が将来的に構想されることも検討してよい。

1.2. 課題の展開

1.2.1. 現代社会が抱える問題群

世界が直面する問題群は70年万博の頃とはかなり様変わりしている。当時は東西冷戦下にあり、ベトナム戦争が泥沼化し、アメリカとソ連が覇を競いあっていた。その一方で産業廃棄物による大気圏や水圏の汚染も進んでいたが、局地的・個別的な問題と考えられ、技術的には解決可能と楽観視されていた。また、化石燃料などの地球資源の有限性もほとんど意識されていなかった。地震や火山噴火といった自然災害も少なく、気候も世界的に安定していたため、「緑の革命」のような食糧生産が成功を収めていた。いまとくらべれば、「平穏な時代」であった。

しかし、1980年代以降、気候が激変し、大規模な火山噴火や地震が頻発するだけでなく、局地的な寒波や熱波、洪水や早魃なども農業に大きな影響をあたえはじめた。原発事故もスリーマイル、チェルノブイリや福島で起こり、核問題の解決なくして人類の未来を語れなくなっている。科学技術の進展が資源枯渇や環境破壊の切り札になると無条件で考える人は現在ほとんどいない。さらに、この間、地球の実態と生態系に対する理解が飛躍的に前進し、科学技術の進歩がかならずしも人類に幸福をもたらすものではなく、かえって生命に大きな打撃をあたえ、人類の存続をあやうくすることがいつそう広く深く認識されるようになった。



他方、社会に目を転じると、東西の冷戦体制が崩壊しグローバル化が進展すると、さまざまな民族問題や宗教問題が顕在化し、多くの難民を生み出す結果となっている。「難民危機」は「人類の危機」であると断言する見方もある(アイ・ウェイウェイ、艾未未)。また紛争地域をはじめとして貧困や飢餓、あるいは疾病に悩む地域が世界的に拡大し、深刻な事態を招いている。グローバル化は同時に格差を助長し、社会に亀裂とひずみをもたらした。そこには社会的偏見、差別、不寛容という問題系もあれば、人間の尊厳、人権、QOLといった課題系もある。そうした状況のなかで、「いのちの安全保障」をはかり、「多様で心身ともに健康な生き方」を世界の人びとと共に考える機会を万博は提供することになる。とくに社会的矛盾のしわ寄せに苦しんでいる難民やマイノリティー、あるいは子どもや高齢者などにとって「持続可能な社会・経済システム」をどうすれば実現できるかを世界中のあらゆる年齢層の知恵を結集して真摯に問うことが求められる。

いのち輝く未来社会をデザインする場合、とりわけ加齢や死の問題を避けて通ることはできない。たとえば、日本と韓国は少子高齢化の点では世界のトップランナーである。そのため、高齢者の医療や介護、あるいは交通事故などへの対処法や財源に関して、若年層や壮年層との利害対立が激化している。しかし、これは文化(人びとの生きる姿勢や価値観)の問題というよりも、文明(社会・生産システム)に起因する構造的な問題である。まさに「持続可能な社会・経済システム」に直接つながる問題と言えよう。とはいえ、文化的課題としては「老年哲学」のような未開拓かつ未熟な段階にある思想や価値観こそが、来る25年万博のメインテーマとなってもおかしくはない。

以上、現代社会が抱える問題群を点描してみたが、その原因は二点に集約される。一つは「行き過ぎたグローバリズムの弊害」とその反転像でもある「自文化中心主義」であり、もう一つは「近代合理主義精神の限界」である。前者は民族・宗教・紛争・難民・貧困問題をはじめ「少子高齢化」や「子どもたちの危機」などさまざまな社会問題をおこしている。対して後者は、AIやゲノム編集に代表される技術を開発する一方、さまざまな「倫理問題」「資源問題」「環境問題」「自然災害」等を誘発している。しかも、両者に起因するところの安定的な食糧資源や安全な水資源の問題は人類に生存の危機をもたらしている。

1.2.2. 課題解決に向けて

「いのち」をめぐるいくつかの問題例をあげてみたが、世界が抱えるさまざまな問題群に対して万博はどのような役割を果たしうるのか。換言すれば、万博はどのような「仕掛け」をつくって、課題解決をめざすのか。ここではとくに「熟議型万博」に焦点を絞って展望を述べたい。

まず「問題解決へのヒント」を見だし、それを大小さまざま、全国津々浦々、場合によっては海外にも出向き、「熟議」することである。当然、各種の「反対論」も予想される。

それをも包摂しながら熟議を重ねれば、いろいろな活路が開かれるはずである。

さらに万博でこそ可能な方法として展示がある。展示をとおして課題を発見し、ともに考える場をつくることが十分可能である。従来、とすればパビリオンのプロデューサー(建築・展示)に依存しがちであった展示を「熟議」を通じて共有化・具体化していく過程をとれば、段ちがいの成果が得られるであろう。子どもや高齢者の目線、地方や地域の目線、女性やLGBTの目線、難民や少数民族の目線などさまざまな観点から検討を加えることができるはずである。さらに国内にとどまらず、外国からの人材に道を開くこともありえよう。

また、「いのち」をめぐる問題についてたがいに学び合う場を万博会場内に設けることもできるはずだ。「いのち」にかかわる語彙を国連公用語にとどまらず、あらゆる民族諸語から選び出し、翻訳し解説するだけでも、その多様性から異文化における死生観・世界観にふれることができよう。国連の枠組みを越えることができるのも万博ならではの試みと言えよう。

肝心なことは、準備の段階から若手を含め「オールジャパン態勢」をつくってゆくことである。

1.2.3. 日本モデルの提示

大阪の万博会場には日本をモデルケースとする「熟議」された展示があってもよい。たとえば、先述したように、日本の地質学的・気候学的特異性と縄文時代以来の自然適応特性を示すジオラマ展示を会場に設けたとする。そのうえで全国にあるジオパーク(現在44カ所、2025年には60カ所以上)や重要文化的景観(現在64件)に誘導すれば、より具体的な理解につなげることができる。とくに外国人の場合、母国での伝統的生活の再評価をうながし、「持続可能な社会・経済システム」の構築につながる可能性が高い。会場からジオパークへといざなうことは「熟議」の発展系とも言えるかもしれない。あるいは共創モデルのきっかけともなろう。日本モデルの提示は共創モデルの創造に貢献してこそ意味があるからである。

同様に、縄文時代以来の日本の食をテーマに「いのち」について考える場を提供することもできる。世界文化遺産となった和食は、地域や季節によってとれかたが異なる多様な食材(野菜や魚介類)を少量摂取する点に特徴がある。伝統的な和食は農林水産資源の地産地消サイクルと徹底有効活用、廃棄物の自然界へのフィードバックから成り立っている。土壌破壊や地下水汚染を引き起こす大規模な単一品種栽培農法とは対極に位置し、生産に要するエネルギー効率が悪く高カロリー食生活とも一線を画している。和食を体験した外国人来場者をグリーンツーリズムにいざなえば、食を通じて人類共通の価値観とともに文化の違いに気付き、相互理解を深めることができるであろうし、母国での食資源の生産・流通・消費システムを見直すきっかけともなり、「多様で心身ともに健康な生き方」を実現していた伝

統的な農林水産業を再評価する契機ともなりえる。

さまざまな(現代)アート作品(絵画・インスタレーション、演劇・短編映画など)をつうじて熟慮・熟議できる場を設けることも重要である。最初に具体的な情報を提供するのではなく、アートという表象を出発点として、議論を重ねることで具体事例が導かれ、理解が進み、さらなる思考をスパイラルに深めることを狙うことができる。

祭りや儀礼もまた多様な世界観・死生観や対処法を例示する機会となる。たとえば、世界各地でおこなわれている死者の追悼や葬送の方式を紹介することで、生と死の循環に関する認識を深めることができる。

たとえば大阪・関西に限って言えば、上方の歴史や文化に根ざした伝統芸能(人形浄瑠璃や上方歌舞伎)を関西発の先端技術(バイオ、セラミック、ロボットなど)と結びつけ、世界に向けて披露することで、新しいレガシーを生み出すことも夢ではない。

以上のように、芸術作品には展覧会のような場をあたえ、音楽や芸能には演奏会や公演会のような舞台を提供すれば、観覧者にとってはエンターテインメントともなり、一石二鳥の効果を生む。

エンターテインメントは万博の大切な要素である。多くの来場者にさまざまなエンターテインメントを提供することが万博成功の鍵を握っている。エンターテインメントは「娯楽、演芸、余興」(広辞苑)とあるが、人間の五感や認識に心地よく受容されるものであれば、広義のエンターテインメントと言える。「ホモ・ルーデンス」(J. ホイジンガが提起した人間・文化観。「遊ぶ人」の意)は万博のようなイベントではもっとも参考となる概念である。また、そうした

点については、面白さを追求する知的空間を創出し、社会に貢献しようとする博物館学等の経験や知識から学ぶことも多いはずである。

1.3. 熟議の展開

1.3.1. 熟議万博へのインセンティブ

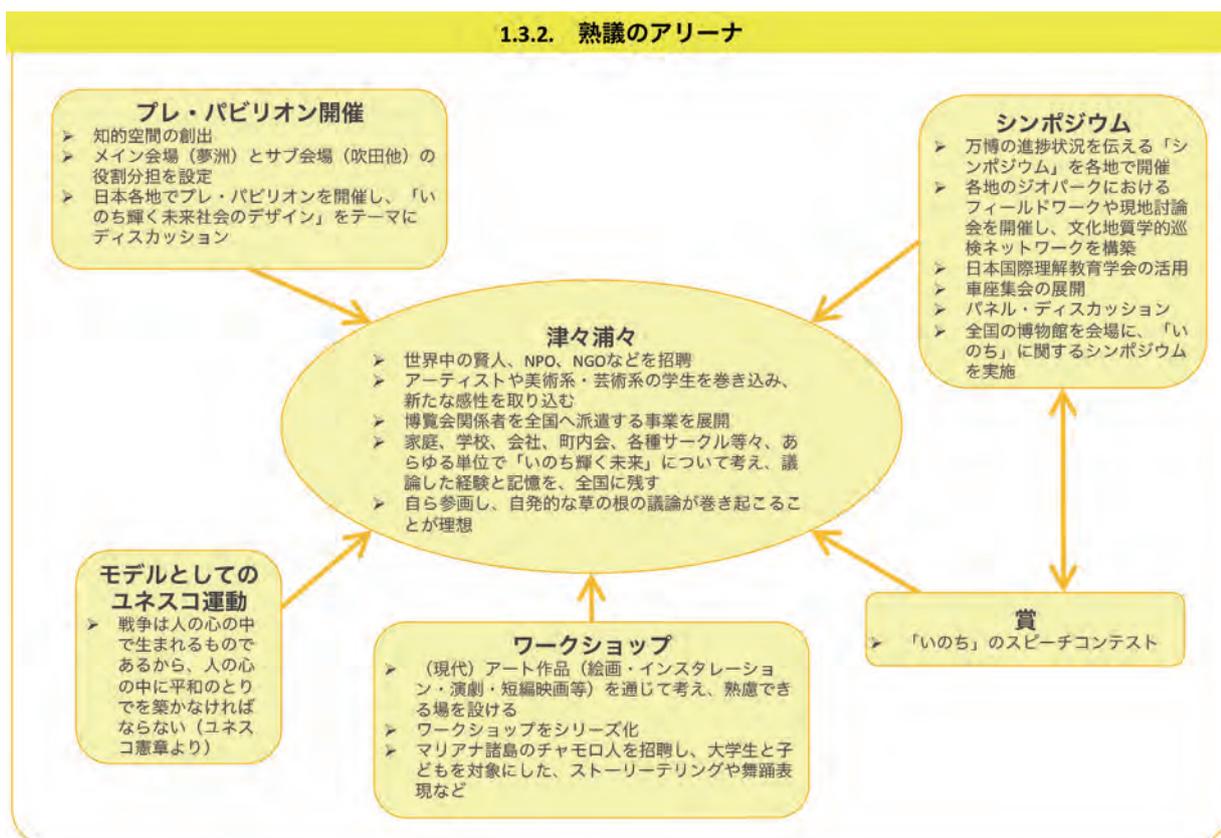
「熟議万博」にむけて各種の助成事業が始動するとはずみが見つく。いのちや医療をテーマに取り上げる学会やNPOなどの組織に助成金を出し、万博後にも知的財産や制度が各組織体に残るようにする。市民や企業など「民」の力で練り上げる研究会に助成することも有意義である。また、「いのち」を考える万博を教育内容に取り入れる教育関係機関を対象とした助成を考えてもよい。その場合、人材の派遣、プログラムの提供、教育実践の募集、成果の表彰などを考慮する必要がある。さらに幅広い活動団体、医療支援団体、NPO、NGOを視野に入れることも重要である。

1.3.2. 熟議のアリーナ

討議の形態には車座集会をはじめブレーン・ストーミング、パネル・ディスカッションなど種々あるが、代表的なのはシンポジウムとワークショップである。<「いのち」について考える大運動>には熟議が欠かせない。

万博の途中経過を報告しながら、来場者とともに万博を作り上げていく活動は、万博が動いていることを内外に示すよい機会となる。日本博物館協会などに働きかけ、全国の博物館を会場に「いのち」に関するシンポジウムをおこなうこともできよう。

25年万博開催の2年前に「プレ・パビリオン(仮称)」を



開催し、多様な国や地域の人びとを招聘して、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、本メンバーそれぞれの得意分野を生かしたワークショップを開くのも一案である。開催場所は大阪にこだわらず、メンバーが動きやすい場所で実施する。たとえば、帝京大学で開催の場合は、マリアナ諸島のチャモロ人を招聘し、大学生と子どもを対象としたストーリーテリングや舞踊表現などをつうじて「いのち輝く未来社会」を考えるワークショップが可能である。

メンバーが活動する学会で「いのち」を考える万博をテーマにシンポジウムを開催することもできる。日本国際理解教育学会の場合、「人類の進歩と調和」から「いのち輝く未来社会のデザイン」を教育・国際理解教育の視点から熟議することができる。あわせて分科会を設け、教育実践の共有をおこなえば、さらに豊かな成果が得られるであろう。

1.3.3. 多元的な会場

メイン会場の夢洲はいくつかの深刻な問題をかかえている。まず、鳥や魚をはじめとする生き物への直接の害が想定されていて、日本野鳥の会は絶滅危惧種への影響を指摘し、反対声明を出している。また、国内外の公的な生物学系研究機関もこの万博に関与しにくい。くわえて愛鳥財団をもつ企業も同様の態度をとる可能性がある。

埋め立て地である夢洲の脆弱性に関してはこれまでも指摘されているが、南海トラフ地震はもとより、2018年の台風や高潮の経験を十分にふまえた対策を講じることが必須である。

夢洲をメイン会場とし、周辺にいくつかのサテライト会場を設ける案が浮上している。その一つの候補として、70年万博のレガシーである千里万博公園があげられる。ここではインフラ等もある程度整備されており、自然ゾーンを維持しながら、文化ゾーンにおいては既存施設の改修や増築などに着手しやすいと考えられる。

千里万博公園だけでなく、上野公園(内国勸業博)、沖縄海洋博公園、つくばエキスポセンター、愛・地球博記念公園など博覧会の遺産を活用することも検討に値する。さらに、博物館などの既存施設やエコミュージアムを含む町並みを活用した多くのサテライト会場を設けることもできよう。場合によっては、海外の万博会場跡地をサテライト会場としてつかうことがあってもよい。

2 熟議スパイラル

熟議マンダラは上から俯瞰した二次元の構図であるが、熟議スパイラルは横から見た三次元の構図である。これは草の根の運動をイメージさせ、全国津々浦々、プロフェッショナルから市民まで、老若男女の多くの人たちを巻き込んで展開する渦巻きに表象される。それは勝手連であってもよく、時には無礼講となってもかまわない。しかし、肝心なことは、記憶に残り、記録にとどめられる熟議を重ねてゆくことである。

たとえば、早い段階から博覧会の関係者(行政、デザイ

ナー、イベンター、研究者、パフォーマーなど)を国内各地の学校や教育施設、博物館、美術館、図書館などに派遣し、「いのち」を考える万博についても熟議する集いを広げてゆく。自治体にプレ・パビリオンの開催費用を提供し、「いのち」とつながる何かを構想するイベントを開催してもらうことも一案である。

大阪・関西には他地域では考えられないくらい万博熱のある人が多く、そうした人びとを「いのち」を考える万博に向けて巻き込んでゆくことも大切である。

3 70年大阪万博からの遺産(ヘリテージ)

1970年大阪万博の遺産は多岐にわたり、千里万博公園、太陽の塔、EXPO'70パビリオン、国立民族学博物館、万博基金、国立国際美術館など枚挙に暇がない。しかし、「人類の進歩と調和」の基本理念にまさる遺産はない。その結びで謳われたのは次の文言である。「20世紀は偉大な進歩の時代であるが、同時に今日までは苦悩と混乱を避けることができなかった。私たちはこの世界を、完全な平和が支配し、真に人類の尊厳と幸福をたたえうところのものとして、次の世代につたえたい。この万国博覧会が、そのようなよき時代への転回点として役立ち、その場所と機会を提供しえたとするならば、私たちの光栄はこれに過ぎるものはないであろう。」

4 25年大阪・関西万博の遺産(レガシー) ～有形遺産から無形遺産へ～

70年大阪万博の基本理念を引き継ぎ、あらたなテーマ(いのち輝く未来社会のデザイン)と基本理念(熟議マンダラ)のもと、2025年大阪・関西万博を次代に引き継ぐアーリーナにしたいと考える。

25年万博の終了後、多くのパビリオンは解体・撤去される。埋め立て地の舞洲に残留させる必要はない。むしろ、その精神を受け継ぐ熟議の場や、問題解決のための組織体や制度が形成されるならば、2025年大阪・関西万博の貴重なレガシーとなるであろう。

熟議型の場を提供する団体の一つにアスペン研究所(注2)がある。25年万博後にアスペン研究所が主宰してきた「アスペン会議」のような機能を果たす継続的な熟議の仕組みができれば、これこそ未来に引き継ぐべき重要なレガシーであり、有形にとられない無形のレガシーを残すという21世紀型の万博のあり方を示す一つのモデルとなるにちがいない。

(注1) KJ法とは発案者の文化地理学者、川喜田二郎の頭文字からとった名称である。本来、フィールドデータから論理を抽出する方法として開発されたが、企業などの作業グループでよく使われる手法となった。

(注2) アスペン研究所は学者、芸術家、実業家たちがゆつくりと語り合い、思索するための「場」を提供することを目的とし、1950年に設立された。本部はアメリカのコロラド州デンバーにあり、世界各地で独特のセミナーが開催されている。日本では1975年に活動がはじまり、1998年に日本アスペン研究所が誕生した。

※画像と文章の無断転載、無断引用は固くお断りいたします。

「大阪・関西万博を考える会」メンバー（あいうえお順）



飯笹佐代子氏

青山学院大学教授（多文化社会論、文化都市政策論）

国立民族学博物館の共同研究「聖空間の経営人類学的研究」（研究代表者：中牧弘允・国立民族学博物館教授（当時）/2008～2011年）のメンバーとして、上海万博の調査を行う。



奥野卓司氏

（公財）山階鳥類研究所所長、関西学院大学名誉教授（情報人類学、人間動物関係学）

ポルトビア'81やつくば'85に携わり、花博では構想委員会委員、愛・地球博では市民広場NGOイベント・プロデューサーとして参画。豊富な経験から万博、博覧会のありようの変容を実感、大阪・関西万博の構想に疑問も。



沓名貴彦氏

国立科学博物館研究主幹（保存科学、技術史）

愛・地球博が開催された愛知県豊田市出身。現在は、つくば科学万博近くの職場と上野公園の職場を行き来する日々で、万博と何かの縁を感じている。日本の博物館の父「田中芳男」の活動を鍵に、草創期の博覧会と博物館の発展に関する研究を行う。



五月女賢司氏

吹田市立博物館学芸員、国際博物館会議地方博物館国際委員会理事（博物館学、近現代史）

「EXPO'70～博物館からこんにちは!」展（2018年）、「万博を追い求めた日本」展（2019年）を担当。現在、「万国博を考える会」による1970年万博のための基本理念草案作成の背景について研究を進めている。



佐野真由子氏

京都大学大学院教授（文化政策学、外交史・文化交流史）

万博研究とは卒業論文以来の付き合い。2010年からは広範な学術的顔ぶれによる共同研究「万国博覧会と人間の歴史」を主宰している（2015年に同名の論集を刊行）。大阪府・国際博覧会大阪誘致構想検討会委員（2015年4～7月）、経済産業省・万博計画具体化検討ワーキンググループ委員（2019年2月～）。



中山京子氏

帝京大学教授、日本国際理解教育学会副会長（国際理解教育学、社会科教育学）

人間の営みをどのように解釈し、部分をどう「切り取り」教育の場にもちこむかということに関心を持つ。科学技術の進歩、異文化の交わりの祭典のような万博を通して、子どもたちに探求への希望を伝えたいと考える。



原田憲一氏

前至誠館大学学長、比較文明学会会長（地質学、文学）

日本館（1970年大阪万博）に設けられた巨大マルチスクリーン用の特殊カメラのレンズ設計に父が関与していた縁で招待券を入手し、市川崑監督製作の『日本と日本人』を観た。ストーリーは覚えていないが、映像美に圧倒されたことは今でも鮮明に覚えている。



中牧弘允氏

国立民族学博物館名誉教授、吹田市立博物館館長、千里文化財団理事長（経営人類学、文学）

最初に見た博覧会はニューヨークの世界博（1965）。70年大阪万博は2度観覧。2010年の上海万博では日中の研究者約20名を組織し、前後3年にわたって調査研究。国際日本文化研究センターの万博共同研究（代表者：佐野真由子）のメンバー。大阪府・国際博覧会大阪誘致構想検討会委員（2015年4～7月）。

座長

熟議を重ねる
「大阪・関西万博を考える会」のメンバー



左から五月女賢司氏、沓名貴彦氏、奥野卓司氏



左から中山京子氏、佐野真由子氏、原田憲一氏



左から飯笹佐代子氏、中牧弘允氏